

## 幼児の笑いとその保育における意味（5）

### 五 歳 児 の 笑 い

友 定 啓 子

卒園前の最後の一年間、笑いは大きく変化をとげる。それは、笑いの二面性を子どもたちが認識し始めたからのようである。理解力も増してきて「おかしさ」を自らつくることができるようになり、その笑いを他者と共有することに積極的になる。また人間関係が恒常的なものになってくることに、笑いが密接な役割を果たしているように思われる。五歳児の終わり頃に、子ども自身が笑いをコントロールする場面が出てきたことも大きな変化である。最後にからだのタブーに続くものとしては性に関する笑いが出てきたことが特徴としてあげられる。

#### 一、おかしさからユーモアへ

四歳児にはおかしさを自分で作ることは少し難しい。作っても自分が笑ってしまうところがある。五歳児になると、特に言語を駆使して、自分で笑いを作り、相手を笑わせることを楽しむようになる。まず、言語の音声をつかって遊ぶ。

△記録1▽ 『ごはんつぶつぶつぶ、いっぱいみなみなにつけるん?』「何それ、英語?」

△記録2▽ B夫「なまりの兵隊の新しい歌考えたよ。ナマコの兵隊トチタタ」A夫「ナマズの兵隊トロロロ」L夫「なんやー、デバ男!」「たぬきのくろべえ男!」「たぬきのくろべえきつね!」

次に、同音異義を楽しむ。一つの言葉に二つの意味を持たせることができるようになる。かけことばである。

△記録3▽ 先生「今から、保育所の園歌うたうから、一緒に歌ってくれる?」男児四、五人「えーんか、えんか(いーんですか、いいんですか)」

△記録4▽ 男児が川の絵を描く。その流れの中に漢字の川の形に見える部分がある。「なんじゃ?、こりゃ、川か?」「川って書いてある」「そうじゃ、川」「ギャグか?」「ギャグ、ギャグ」「ふとんがふつとんだ」

そして、なかには論理の逆転まで考えることができる子もいる。

△記録5▽ 先生がお手玉を作る時の注意をする。「針はあぶない、目に入ったらたいへんだ」という話をしたら、I夫がニコニコ笑って「じゃ、目つぶつとこう」と言う。

△記録6▽ B夫「ぼく、目で休んでる時、『のんびりしとけ』っていわれたけど、さぼって遊んでた」と笑顔で言う。先生が「アハハハハッ」と笑う。

こういうユーモアのセンスには先生も笑ってしまう。そこで起こっていることに対して、一定の距離をおいて見ることができるのである。これを子どもたちは人間関係の形成に活用する。このように笑いを積極的に作り出すことによって、共に共感しあい、親和的な関係を強化していく。

## 二、笑い笑われる関係

一方、同じ笑いの共有でも、相手との関係が切れている笑いもある。

△記録7▽ 男児三人が笑ってP夫を見る。P夫、顔をまっかにして相手につかみかかろうとする。

△記録8▽ 給食時、女児数人がF夫を囲んで笑いころげている。F夫がふざけた拍子に手が自分のコップに当たってしまい、お茶がこぼれてしまったのである。まわりの子どもたちは「アハハハ、アハハハ」と笑い、「自分のをたおした」となおさら強く笑う。「ヒーヒヒ」とおかしくてたまらないというように笑う。

△記録7▽での笑いの内容は不明である。しかしここに笑いの典型的な人間関係を見ることができる。笑う者と笑われる者がいて、そこには共感関係は見られず、むしろ笑われる者には侮辱であり、攻撃と感じられる。一方笑う者同士は、笑いによって攻撃の緊張を解消し、共感関係を維持しているのである。

△記録8▽のF夫はよくふざけるし失敗も多い。みんながそれを知っている。行為自体のおかしさもあるが、これはF夫であるということが笑う側の子どもたちにとっては意味がある。でなければこんなにひどく笑わない。F夫は笑われることを求めているようにも思われる。喜んでいるわけではないが、おこるわけでもないし反撃もしない。類似の記録がいくつかある。

F夫に関しては気になることがずっとあった。この子の笑いは育っていないのではないかと思えることが続いている。どこか身体感覚的な笑いが多いのである。人と関わりを持つとうとする時、この子は自分のからだを差し出す。わざとぶつかっていたり、踏まれるようにしたりするのである。自分の方からである。みんなが列をつくって並んでいるようなところでわざわざたおれ込む。そうやってからだの接触を図って、そこでの快感を楽しんでいるように見えるのである。倒れ込まれた子がそれに対抗して押し返しても、F夫はいやがらず、むしろ喜んでるように見えるので双方でおもしろがっている。

表面的には親しんでいるようだけれど人間関係ができていない。そして、記録にも見られるようなふざけをよくする。みんなに笑ってもらいたいと思っているようである。そこで自分の存在を確かめているようなところがある。ほんとうに相手との交流を含んでいないので空回りなのだが、それに気づいているのかどうか心もとない。まわりの子どもたちはそれを知っているので、安心して笑っているのである。

四歳児の時には、こういう関係はおおむね一対一の関係であったが、これが記録のような一対多になることが出てきた。こういうことが積み重なり、そのクラスの集団の構造化に一定の役割を果たしているのではないかと思われる。

### 三、和解の笑い

△記録9▽ 女児四人が私を呼びに来た。私はこの少し前にこのグループがHを押しつぶそうとしていたのを見ていたので「いじめられるのはいやよ」と言う。少したじろぐが、す

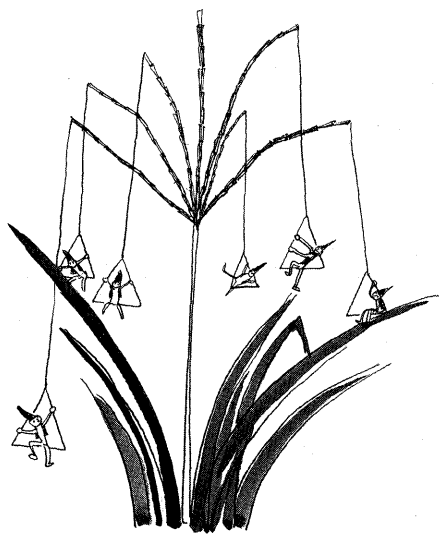
ぐ「いじめらんじゃない。あの砂の中になんか入っているから」と言う。信用することにして砂山をくずし始めたら、まわりに集まって「まだー」と言っている。用心しながら掘っていたら「棒を取ってもっともっと深く掘って」という。その通りにしていると、後ろからいきなり背中にとび乗って来た。私が掘っている後方に回り、フェンスの上から私のからだの上にとび降りてくるのである。四人が次々とならんでフェンスの上にいる。からだがかくずれたので乗り損なったが、意図がわかり、私は「うそつき。もう絶対、信用せん」と言って去る。四人がやって来る。「あんなに言ったのにうそついたんだから、もう信用できない。遊ばん」と拒否。これを何度かくり返す。その間、私は他の女児数人と砂遊び。R子「いやアーね。いじめて」と言う。私に拒否されて、四人は再び砂山のところに集まって話をしている。私がそちらのほうを見ると、目が合い、なんとも言えない後味の悪い笑顔をする。しばらく目をそらし、再び見ているとまた目が合い、ニヤニヤ笑う。これを何度か繰り返す。結局むこうも不安定になったようで、私のところにやってくる。「あぶく

たった」をすることになる。これは気持ちよく遊ぶことができた。給食の時、一緒にテーブルに来てくれときそわれる。

この記録については、保育者としての私の行為に問題を感じられる方がおられると思う。特に「うそつき」とか「信用しない」などのことには抵抗を感じられると思う。しかし、興奮して思わず投げつけたことばではないことだけはお伝えしたいと思う。

私はこの日、外に出た時にこのグループがものかげで何か相談しているのを見かけた。変だなと思った矢先、ふと気づくと、この子たちが二、三人でHのからだに重なるようにおしかぶさっているのが見えた。Hは泣いてはいなかった、その重さを持ちこたえていた。それで私は強く「いじめられるのはいやだ」と言ったのである。この子たちはしっかりしている子たちであった。契約を結ぶような気持ちであった。確かめたのだからと思った私は甘かった。彼らは私の予想をはるかに越えていた。さきほどのHに対しても同じことをしたのだということ

がわかった。今までに子どもに対して「うそつき」「信用しない」などということばを使ったことはなかったが、ここは言ってもよいと思った。この子たちはその意味がわかるはずだと思ったのである。



一方で私は裏切られたような気持ちを感じていた。それから立ち直るのに時間がかかった。それがその後何度か和解を求める子どもたちをすぐに受け入れられなかった理由である。が、このままにしておいてはいけないと思ひ直し、頭の中でどんな遊びを提案しようかとだいたい悩んだ。いろいろな遊びが頭に浮かび、あれでもないこれでもないと思ひ悩み、結局「花いちもんめかあぶくたつたならいいよ」というと、子どもたちはほかの子たちと一緒に「あぶくたつた」を選んだ。結果的にこれではよかったようだ。大勢で手をつないで輪をつくり、声をそろえて歌いながら回る。歌い始めながら、みんなの中におだやかな明るい気分が流れたのが感じられた。気持ちのいい笑顔がもどった。不安定な状況の後に、安定した形のある遊びを私自身が求めているように思う。この遊びの後半は緊張関係をはらんで、結構スリリングである。五歳児にはこのリズムの緩急がおもしろい。ほどなく給食の用意のため私は保育室にもどった。あとから、この子たちも部屋にもどってきて、配膳の間にも遊びた

いと言う。私が「静かにね」というと、部屋の片方のステージの上で、七、八人が声をひそめ足音をしのばせて「あぶくたつた」をやっていた。その姿はユーモラスでおもしろかった。

保育の場でこのような子どもの否定的な感情に直面することはめずらしくない。人をおとし入れたり、相手が困るのを見て喜んだりする、その感情や行為をよくないと言うのは簡単である。しかし、その子がそうせずになむように援助するのはそうたやすくはない。子どもたちはそうすることによって自分を守っているのかもしれない。また、自分のやっていることが他者にとってどんな意味を持つかについては思い至っていないことも多い。このように高度に組織化されたように見える行動も、おそらくどこからの借物だと私は思う。私が子どもたちを突き放した後に見せた、彼らの笑いの表情は気まずいものであった。でも、そこに彼らの方向を変えたいという思いも感じられた。それを受け入れるまで少し時間がかかったけれど、その気持ちをなんとかつなぎ止めるこ

とができてよかったと思う。

#### 四、攻撃の笑いのコントロール

△記録10▽ みんなで手紙を書くことになり、美しい便箋が一枚ずつ配られた。さあなんと書くかというところで、Uがいきなりその便箋になぐりがきを始めた。同じテーブルの四人が息をのみ、「あーっ!」と声をあげる。G子、私をちらっと意識して「A夫見てー、Uちゃんがこんなの書いたー」

△記録11▽ B夫、F夫に「変な言って言われても、気にせんことよ」D男、F夫に「変な顔ー、変な顔ー」N夫「おい、人の変な言って言ったってしょうがないよー」

△記録10▽は、記述からではわかりにくいのが、G子の顔は明るかった。しかし「笑ってはいけない」というように自分をセーブしたように感じられた。これまでのこの子であればここでは笑っていたと思う。私という大人がいたかもしれない。笑われた相手のUは障害を持った

子どもでもある。先生の日頃の対応から「この子は特別だから笑ってはいけない」と思っていたのかもしれない。

△記録11▽も似ている。変な顔とはやしたてる子がいる一方で、それを気にするなという子どももいて、たしなめる子どももいる。四歳児の時点では笑っていたことを、五歳児ではコントロールし始めたといえるだろう。そこには意志の発動が感じられる。これまで率直に感性を表現していた子どもたちが、それを制約し始めたことは重要である。たとえ大人の存在下であったとしても、彼らがひとつの価値観を取り込み自らの行動に制約を加えたことは、自我の統制が行われたと考えることができる。大きな変化といえる。これは子ども自身の中で、笑いの攻撃性が認知できたからではないかと思う。

#### 五、性に関する笑い

△記録12▽ I子がアイドルのハイレグ姿のプリント入りハシカチを持ってきた。それを男児の顔にくっつけるように

して見せて歩く。男児は近づけられると、顔を背けたり目をつぶったりして見ないようにする。その男児のあわてる反応がおもしろくて、I子はあちこちの男児にして歩く。

K夫もやられて私に耳打ちする。「エッチなんよ」

△記録13▽ A夫と私が並んで腰かけて話をしていると、ピアノのそばにいたB夫とI夫がニヤニヤ笑って、A夫の方を見て、「くっついた……」と言っている。二人の冷やかしの笑いに負けないように話題に引き込む。

四歳児で、からだのタブーが笑いを引き起こすのによく使われることを報告した。排泄に関わることをわざわざとり上げて笑いの対象にするのだが、それがこの記録のような男と女という性的な意味合いを帯びてきたのである。子どもたちにとって、排泄の体験は快感でもあり抑圧の間でもあるという、アンビバレントな体験であるといえる。性的な関係も、彼らにははつきりとはとらえられないけれども、排泄によく似たアンビバレント性を持ったものとして感知されていることは確かであろう。

性に関する大人の様々な反応を見れば、明らかに感じとれることである。二つの相反する感覚による緊張を笑いとうけとめることによって、かれらはこの問題をようやくとりこんでいるのではないかと思う。

今回は否定的な笑いに焦点をあてたかたちになってしまったが、からだや運動に関する笑い、自己および他者への親和受容の笑い、理解の笑顔など、依然として健在であることを添えておきたい。五歳児では笑いの二面性が子ども自身に認識されつつあるのではないかと思われる。

(山口大学)